

経済史における勤勉革命論の射程——地域の個性を把握する方法——

大 島 真 理 夫

はじめに——講義理解の前提——

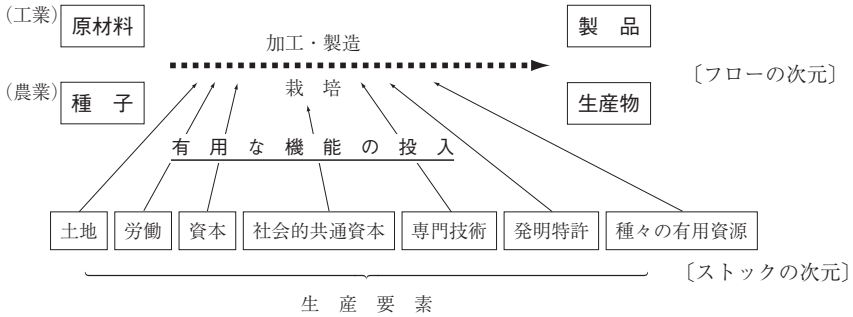
私たちは、二〇〇九年の暮れに『土地希少化と勤勉革命の比較史——経済史上の近世——』（大島編著、ミネルヴァ書房）という本を出しました。これは、社会経済史学会の全国大会を大阪市立大学で開催した時（第七三回全国大会、二〇〇四年五月）の「共通論題」の報告やコメントをもとにして、さらに新たな執筆者にも加わっていただけで、出版したものです。今回、講演の機会を与えられたのは、この出版がきっかけであったと思います。

本日の講演は、まずはこの本の内容をできるだけわかり

やすく説明し、「勤勉革命」という概念はどのようなものか、この概念を使うことによって、近世という時代の世界の各地域の経済史がどのように見えるか、ということをお話しし、そして後半はこの本の出版後考えていることで、地域の個性という点では、「風土」の違いということが一層重要なのではないかということをお話しようと思います。

「勤勉革命」という言葉は、一般には耳慣れない言葉だと思っています。この概念を理解するために、少しだけ、経済学の基礎をおさらいしておきたいと思います。図1は、経済学において、様々な生産物の生産過程が、どのように理

図1 生産過程におけるフローとストック



出所：筆者作成。

解されているかを示したものです。図の上部の水平方向の太い破線の矢印は、原材料が加工されて、製品になって行くプロセスを示しています。その矢印野線の下方に、土地、労働、資本などと書かれて四角で囲まれているのは、生産過程に様々な働きかけを行って、原材料を変化させることに貢献する要素（生産要素）です。原材料への様々な働きかけは、細い実線の矢印が示しています。働きかけの内容は、さまざまです。こうして、原材料が加工されて、製品ができあがっていくプロセスは、「フロー」（流れ）の世界です。よくニュースに出てくるGDP（国内総生産）とは、このフローの世界について、単位期間（たとえば一年とか四半期とか）にどれだけの付加価値が生まれたかを、統計的に計算したものです。これに対し、フローの世界に有用な働きかけを行う源泉である、土地、労働、資本などは、「ストック」（蓄積）の世界です。つまり、単位期間の生産で、消耗して消え去ってしまうのではなく、複数期間にわたって存続して、継続的に生産過程に寄与する、経済資源です。建物や生産設備、道路や鉄道などは、フローとして生産されますが、単位期間内に消耗し尽くされるのではなく、次期以降も経済資源として機能します。このストックについて

ては、フローのGDPのように計測して、比較可能な数値とすることは行われていませんので、あまり話題に上りませんが、GDPを生み出す源泉ですし、人びとの豊かさにとって、基礎的な重要性を持っています。ただ、注意しなければならぬのは、近代以前の農業社会のように、社会の変化が比較的緩やかで、人間が作り出したものではない土地や労働が基礎的な経済資源であった時代には、経済資源の蓄積量が、自然災害は除いて、その使用による消耗とは別の理由で価値を失ってしまうことは多くはなかったと思われるが、工業化の時代になって、変化が激しくなればなるほど、ストックとしての「(実物としての)資本」「専門技術」「発明特許」などは、すぐに時代遅れになって、経済的な有用性を低下させてしまうことは、注意する必要があると思います。いわゆる「陳腐化」であり、現代は、デジタル化によって、それが絶望的なほどスピードアップしていることは、ご承知の通りです。

少々、くどい説明になりましたが、「勤勉革命」という概念は、この要素投入のあり方(フローの世界)、また、ストックの世界で、ある資源が、豊富に存在するか、希少なものになっているか、ということに関わる概念であること

を理解していただきたいと思います。この背景には、豊富にある資源をたくさん使い、希少な資源は節約して使うことが合理的である、という経済原則があります。これは納得していただけるのではないかと思います。

ここで、注意が必要なのは、「資本」という言葉です。よく使われる言葉ですが、土地や労働などはその内容に理解のズレはないのに対し、「資本」は、様々な使われ方をします。まず、日常語としては「体が資本」とか、「収益を生み出す原資」という意味で使われます。後に出てくる議論ですが、家畜(食肉、搾乳、羊毛などを目的とする「用畜」を資本(stock)という場合、この意味で使われています。実際、英語では、家畜は、livestock、つまり「生きている資本」と表現されています。これは内容的に当たっている表現ですが、この場合は、資本といっても労働など、他の生産要素との代替関係を想定することは困難です。「在庫投資」という概念に類似しています。これに対し、資本は、生産過程で使用されて、他の要素と代替関係を持つ固定資本(典型的には機械設備)という意味もあります。家畜も、牽引用の役畜は、この意味での資本といえます。人間の労働を代替してくれます。

「勤勉」という言葉にも、注意をしておきたいと思います。「勤勉」という言葉は、「日本人は勤勉である」という自己イメージ、あるいは「〇〇国の人は勤勉でない」というような対比的理解があったりします。私たちの場合、「勤勉革命」という概念でいわれていることは、それと無関係ではありませんが、他の生産要素と比較して、労働を多量に投入する、ということであって、価値判断としての勤勉性ということではないことも確認しておきたいと思います。とくに、我が国では、過去に、「減私奉公」的なガンバリや「猛烈社員」的な長時間勤務など、非合理的な「勤勉」が推奨礼賛された経験がありますので、気をつけたいと思います。これは、前述の編著にいたる研究会の中で、執筆者からも指摘があった点であります。

一 「勤勉革命」とはどういう概念か

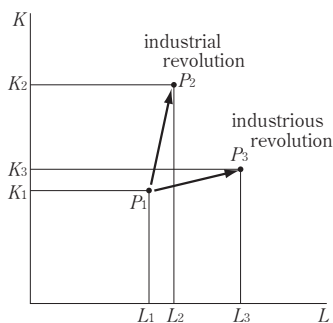
(1) 速水融の勤勉革命論―産業革命vs勤勉革命―

「勤勉革命」という概念を考案し、日本の江戸時代経済史をこの概念を使って描き出したのは、速水融氏です。⁽¹⁾速水氏は、産業革命(industrial revolution)と勤勉革命(industrious revolution)を対比しました。その考え方の基礎

は、前述の要素投入のあり方です。速水氏自身が作成した、図2にそのことが示されています。図2は、縦軸には資本投入の大きさ、横軸には労働投入の大きさが示されています。 P_1 はある生産量を示す点で、その時の資本投入は K_1 、労働投入は L_1 です。 P_2 および P_3 は、 P_1 より右上方に描かれ、生産量が増加したことが示されています。そして、 P_2 の資本投入は K_2 労働投入は L_2 、 P_3 の資本投入は K_3 労働投入は L_3 です。すなわち、 P_1 から P_2 および P_3 へ生産量が增大する際に、 P_2 は労働投入よりも資本投入を大きく増大させて生産量の増加を達成しているのに対し、 P_3 は資本投入より労働投入を大きく増大させていることになります。 P_2 が産業革命で、近世から近代にかけて西欧がたどった道であり、 P_3 が勤勉革命で、近世の日本がたどった道である、というように論じたのです。

注意すべきは、後に勤勉革命概念を受け継いだ、速水氏より若い世代の川勝平太氏や杉原薫氏は、近世日本の勤勉革命と近代の産業革命を連続的にとらえ、それぞれ日本のな物産複合に基づく産業革命(川勝)、労働集約型工業化(杉原)というように、工業化のタイプ論へ接続させていったのに対し、速水氏の場合は、勤勉革命は、近世の達成と

図2 産業革命と勤勉革命
(速水融氏作成)



出所：速水融『近世日本の経済社会』麗澤大学出版会、2003年、226頁。

しては高く評価しますが、その延長線上に産業革命を展望するのではなく、袋小路に入ってゆく径路として理解し、発展的な西欧の径路と対比したことです。「反近代」の方向という言葉もありました。速水氏は、昭和四年（一九二九年）生まれであり、日本が欧米の圧倒的な資本力との格差を痛感させられた世代という時代背景があり、戦後生まれの川勝氏や杉原氏などと、時代の差が感じられると思います。私自身は、この点については、世代は川勝氏や杉原氏のグループですが、速水氏の考えに賛成で、近世日本では、たしかに勤勉革命的な発展はあり、閉鎖経済系の中で目一杯ともいえる発展が見られましたが、仮に幕末開港による市場開放とその後の欧米からの機械輸入や技術移転が

なかったとしたら、日本は閉鎖体系のなかで自前の資源だけでこじんまりと生き続け、産業革命＝本格的工業化への道へと進むことはなかったと思っています。もちろん、川勝氏や杉原氏も幕末開港の意義を無視しているのではなく、力点の置き方の違い、といってもよいかもしれません。

このような評価の違いはありますが、近世日本の勤勉革命そのものについては、①労働投入による経営自立をもたらししたこと、②勤勉＝美德という観念が成立したこと、③西欧のプロテスタンティズムに匹敵する経済倫理が成立したこと、④農民の生活水準が向上したこと、⑤日本の工業化においてこの勤勉性が貢献したこと等々、速水氏が指摘したことは、その後の論者にも共有されていると思います。

速水氏が一九七〇年代に提起した勤勉革命という概念は、しばらくしてから、前述の川勝平太氏が、物産複合という観点に立つ独自の文明論の立場から取り上げて発展させ、引き続いて杉原氏が、現代アジアの工業化をも視野に入れる雄大な構想の中に位置づける、という展開が続いています。そして、海外でも、杉原氏もそのリーダーの一人であるグローバル・ヒストリーという研究潮流のなかで、ケネス・ポメランツ氏が⁽⁴⁾、西欧にもその傾向が見られた、近世

に共通する労働集約的な経済発展の方向性として位置づけています。さらに、少し異なった観点から、ジャン・ド・フリース氏が議論を提起し、二〇〇八年には、そのものずばりの、*The Industrious Revolution* という表題の本を出版しました。⁽⁵⁾ この本は、「消費者行動と家計経済、一六五〇年から現在」というサブタイトルに示されるように、近世という時代に、家計の消費行動が積極化し、それが夫の労働時間延長、妻や子供の賃労働への参加など、総じて家計から労働供給が増加したことを「勤勉革命」と呼んでいます。このように、「勤勉革命」という概念は、最近の経済史研究において活発に議論されていますが、⁽⁶⁾ ここではあまり踏み込まず、この概念が提起された原点である要素投入のあり方に焦点を当てて行きます。

(2) 速水説への主要な疑問

速水氏の勤勉革命論は、近世の日本農業に対して、要素投入という視角を明示的に持ち込み、西欧との比較を行ったという点で、私は高く評価したいと思っています。また、一九七〇年代、近世日本農業の零細性や農民の困窮など、低い評価が一般的であった時代に、積極的な評価をおこ

なったことも画期的であったと思います。

私が、異論というか、やや問題と思うのは、要素投入のあり方の比較を、資本と労働という二つの要素で行ったことです。少々、理屈っぽい話になりますが、もう一度、図2を見て頂くと、この図で、 P_2 と P_3 は、本来は同一の生産物あるいは生産物のセットを生産するための、要素投入の二種類の組み合わせを示すためのものなのですが（等産出量曲線といえます）、図2の想定では、 P_2 は産業革命ですから、当然、工業製品の生産が想定されるのに対し、 P_3 の勤勉革命は農産物が中心のはずです。近代工業化に関する産業革命と、近世の農業革新に関わる勤勉革命を、直接、比較することには無理があると思うのです。もともと速水氏は、西欧では農業においても家畜の牽引力や大型機械が使用されていることを強調されており、同じ農業生産物でも比較ができると言えますが、西欧の農業が資本使用的であったのは、近世に始まったことではなく、出発点からのことで、肝心の近世という時代は、後に述べるように、どちらかといえば労働集約的な方向で農法の改善がみられた時期でした。

さらに、近世の日本農業が労働集約の方向に進んだこと

には誰もが同意するところですが、速水氏が、資本と労働に注目し、労働投入の増大によって資本投入を代替した、というように主張される部分は、疑問が出されています。

速水氏は、この部分を、尾張国における広域的な調査の数字に基づく、戸数・人口・牛馬数の、一六六〇～一七〇年代から、一七九〇～一八二〇年頃への変化によって主張しました。すなわち、この期間に、戸数は約六五%の増加、人口は約二五%の増加であるのに対し、牛馬数が約六八%も減少した数字をあげて、「人力による畜力の代替」があった、と主張しました。具体的には、牛馬が牽引する犁による耕起から、人力の鋤による耕起への転換です。

この点について、斎藤修氏は、速水氏の『近世日本の経済社会』（注1参照）への書評論文⁽⁷⁾において、広範な農業史研究を参照し、近世における牛馬保有の展開は、地域による違いがあり、大きくいえば、西日本では近世を通じて増加、東日本では減少という傾向を指摘しました。そして、西日本の増加は、犁耕の普及や厩肥利用の増大が理由であり、速水氏の想定とは反対でした。東日本についても、「犁耕から人力耕への転換」とみることは困難であると指摘しました。

そもそも、近世日本の農業において、「畜力でも可能な作業を人力で代替する」というようなことがどの程度想定されたのか、私は、あつたとしてもきわめて部分的だったように思います。おおざっぱな論証になりますが、元禄・宝永期（一六九〇～一七〇〇年代）の加賀藩の農業を詳しく描いた農書、『耕稼春秋』⁽⁸⁾と『農業図絵』⁽⁹⁾によって、水田稲作の概略的な農事暦のうち、馬が使用されている作業を確認したいと思います。すなわち、田うち起こし・株割り、種籾水浸、苗代種まき、「踏み土・河底土搬入」、「犁耕」、鋤耕、畔塗り、「田犁返し」、「刈草と鋤込み」、「代掻き」、田植え、水管理、草取り（一番～三番）、中耕、刈り取り、乾燥、脱穀、もみすり、といった農事暦のなかで、「」の作業に、当該地域では馬が使用されています。馬が使用される作業は、重量物の運搬、一般的な耕起、馬鋤かけ、です。重量物運搬などの作業は、さきほどの斎藤氏の指摘によれば、少なくとも西日本では、近世後期に向けて、牛の利用がむしろ多くなっていたと思われます。また、当然ですが、田植え、草取り、刈り取りなど、もともと労働集約的な作業は、農業機械や除草剤が普及した現代とは異なり、近世には人力で行うほか他に方法がない作業です。さ

らに、近世中期以降に特徴的なのは、米作以外のさまざまな農産物の生産が広く普及したことです。それらの多くは畑作物であり、稲作以上に畜力利用の必要性がありませんでした。

総じて、近世の日本で労働集約的な農業が進んだのは、畜力を人力で置き換えたのではなく、人力による高度で精密な作業が増加したためと考えるべきだと思います。

(3) 土地と労働の視点からの勤勉革命―収穫増型労働投入―

私たちは、勤勉革命を、資本投入と労働投入の比較、そして、産業革命と対比させるのではなく、土地と労働という二つの要素に注目し、産業革命との対比ではなく、おなじ近世という時代の世界各地の農業のあり方を同時代比較するという視点に立つことにしました。これは、先行研究の批判ということではありませんが、視点を変えることで、より広い視野を獲得することができるのではないかと主張は含んでいます。この発想の原点は、近世の日本農業で起こったことは、土地利用の高度化であり、それにもなって労働投入が増大し、しかも、トータルとしての収穫（収益）が増大した、ということだったのではないかという

ところにあります。このこと自体は、おそらく日本経済史の研究史の一致するところであり、ほとんど異論がないことだと思います。私たちが言いたいのは、このことは、資本と労働という投入要素の比較ではなく、土地と労働の投入比率の比較という視点に立つことによって、よりよく理解できるのではないか、ということです。すなわち、すでに開発の限界に達して、それ以上の外延的な拡大が不可能な土地を、その利用率を高めることによって、したがって労働投入は増大するが、収益も増大する、ということだった、と言いたいのです。

具体的な事例で、そのことを紹介したいと思います。表1は、山崎隆三氏の古典的な研究である『地主制成立期の農業構造』⁽¹⁰⁾で分析された、摂津国武庫郡西昆陽村（現、兵庫県尼崎市）の氏田家の寛政四年（一七九二）の農業経営の概要です。氏田家の土地所有は、二町九反四畝四歩です。畿内の農家としては、かなり大規模な経営です。氏田家は、この土地をほとんど自作しています。表作では、面積の五七・四％が米作、二八・四％が綿作に当てられています。ほぼ米二対綿一という比率です。米は四一・九石の収穫で、そのうち約半分の二〇・六五石を販売し、銀一八三四・四

表 1 摂津国武庫郡西昆陽村氏田家の農業経営(寛政 4 年・1792年)

品目	収穫高	作 付 面 積			販 売 高			
		面積(畝)	構成比	表裏の別	数量	販売/収穫	販売金額(匁)	構成比
もち米	3.200石	20	6.8%	表作：296 畝(以上)				
米	41.900石	170	57.4%		20.650石	49.2%	1834.4	34.4%
実綿	21本15斤	84	28.4%		16本20斤	77.2%	1365.55	25.6%
小豆	3斗以上	?			3斗	100.0%	22.5	0.4%
いも	?	2	0.7%				242	4.5%
たばこ・なすび	?	2	0.7%					
麦安	7.600石	67	22.6%	裏作：268 畝(裏作率 90.7%)	4.800石	45.3%	259.1	4.9%
大麦	1.500石	12	4.1%					
小麦	1.500石	15	5.1%		11.010石	99.6%	1081.75	20.3%
菜種	11.050石	150	50.7%		1.600石	66.6%	72	1.3%
そら豆	2.400石	21	7.1%					
えんどう	0.370石							
大根	?	3	1.0%					
木綿					13束		460	8.6%
合計							5337.3	100.0%
(米・綿・菜種・木綿合計)							4741.7	88.8%
村内所有地：281畝13歩、池尻村出作：12畝21歩、合計：294畝4歩 小作地：約43畝 宛て作高6.080石(実収5.710石) 小作人5人								

注：「?」は原文のもの。斜線は記述がないことを示す。

出所：山崎隆三『地主制成立期の農業構造』青木書店、1961年、第65表および第68表より筆者作成。

匁を得ています。綿花は、二一本一五斤
 の収穫（一本は四〇斤）、その七七%の一
 六本二〇斤を販売し、銀一三六五・五五
 匁を得ています。綿花収穫のうち、販売
 しなかった二三%は、自家の木綿生産の
 原材料とされて、木綿となって販売され
 たので、綿花生産は、結局すべて販売目
 的であったと言えます。土地利用で計算
 すれば、表作では、米と綿花で八五・八
 %を占めるわけですが、そのうち販売目
 的の土地利用は六五・九%。つまり三分
 の二です。表作の残りの部分にも、小豆
 など、販売目的の利用があります。した
 がって、おおざっぱに言えば、表作では、
 所有地全体の約三分の二の土地が販売目
 的の農産物生産に利用されたと言えるの
 です。裏作はどうでしょうか。裏作率は
 九〇・七%です。裏作の第一位は菜種で、
 所有地全体の五〇・七%です。収穫のす
 べてが販売されます。第二位は麦類です。

ちなみに「麦安」とは裸麦のことです。麦類で、三一・八%、販売率は四五・三%です。別にそら豆、エンドウが七・一%で販売率は六六・六%です。表作と同様に、土地利用の観点で、販売目的の農産物生産に向けられた土地は、裏作二六八畝の七七%に達します。氏田家では、土地利用という観点で、表作の約六六%、裏作の七七%（裏作率は九〇%）が販売目的の農産物生産に利用されていたわけです。これは、高度に市場向けの農業経営であったと言つてよいのではないかと思います。販売高の構成比（年間）をみると、米が三四・四%、綿が二五・六%、菜種が二〇・三%、木綿が八・六%であり、以上の四品目で、八八・九%となっています。氏田家は、各品目の販売価格の動向、肥料代の動向、奉公人賃金の動向などを的確に判断しながら、戦略的に作付け品目を選択していったのです。この経営は、いわゆる「摂津型農業経営」の典型例と評価されていますが、畿内においては、このような農家は決して例外ではなく、規模の違いや作付け品目の違いはありながら、高度に市場向けの農業経営が一般的にみられたと考えられています。

氏田家では、表作では、もち米、米、綿（綿花）、小豆、

いも、たばこ、なすび、裏作では、麦安、大麦、小麦、菜種、そら豆、エンドウ、大根、というように多彩な品目が作られています。そして、この表の基になった覚え帳に記載されなかったような小規模な品目もあったに違いありません。このような多様な作物が、耕作する時期が重なりながら、年間の作業日程が進んでいきます。当然ながら、作業の日程配分は、非常に細かい配慮が必要になったと思われます。また、多くの畑作物は、連作を嫌いますし、地力も減退します。その点、水田は、水の流入と流出があるので、連作障害はなく、地力も維持されます。したがって、田と畑を交替させる、「田畑輪換」ということが行われました。図3は、大和国平群郡宮堂村の例で、徳永光俊氏⁽¹⁾が作成されたものです。二年間の水田と一年間の綿作畑を交替させている様子が見事に表現されています。田を畑に転換するためには、盛土や畝作りなど、労力のかかる作業が必要です。摂津の氏田家の場合については、明らかにされていますが、綿花は連作を嫌うので、おそらくは、同じようなことがあったと考えられます。

以上の事例紹介で言いたいことは、近世日本農業の大きな特徴が、土地の高度利用ということにあり、そして、

図3 大和国平群郡宮堂村の田畑輪換(徳永光俊氏作成)

(□ 稲作 ■ 綿作)

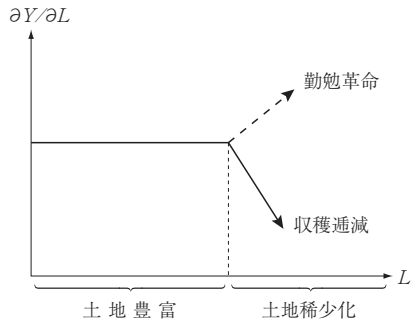
小字	年	文化1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	文政1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	天保1
	辻堂			■			■			■			■			■			■			■			■			■
垣内			■			■			■			■			■			■			■			■			■	
藁城		■			■			■			■			■		■		■			■			■			■	

出所：徳永光俊『日本農法史研究』農山漁村文化協会、1997年、30頁。

高度利用した土地で、市場向けの販売を意識し、細かい配慮と多くの労力を必要とする農業経営を行うことによって、収益の増加を図っていた、ということなのです。そして、このことは、生産過程への要素投入というと、資本と労働との比較ではなく、土地と労働との比較という視点の方が、現実を理解する上で適切ではないかと思うのです。つまり、限られた土地に対して、きめ細かく多量の労力を投入することによって、高い収益を上げる、ということです。先行研究では、先ほどの図2のように、資本と労働という視点から勤勉革命をとらえましたが、私たちは、これを土地と労働という視点から、図4のようにとらえ直しました。

図4のグラフでは、横軸は、単位期間(たとえば一年間)における労働投入の大きさが示されています。右に進むことは、投入労働量が増大することを示します。これに対し、縦軸は、追加されていく労働投入の、最後の一単位の労働に対する産出高の増加分、経済学の言葉で言う「限界労働生産性」を示しています。このグラフが示しているのは、ある村落あるいは農家が、一定面積の土地を与えられた時に、当初は十分に土地豊富で、未利用の空地もあった段階から、労働力(農家数)が増加していくことによって、しだ

図4 土地と労働から見た勤勉革命



注：投入側 L は指数表示の実物、産出側 Y は大雑把であるが貨幣ないし指標的農産物表示の付加価値額を想定している。

出所：大島真理夫編著『土地希少化と勤勉革命の比較史—経済史上の近世—』ミネルヴァ書房、2009年、9頁。

いに希少となり、余剰地は消滅し、限られた土地に多量の労働を投入するようになった段階で、追加労働一単位 of 生産性がどのように変化するかという動きです。土地が豊富な段階では、限界生産性は、一定で推移します。つまり、一軒目の農家、二軒目の農家、というように農家数が増加した場合に、同質の土地が豊富に存在すれば、増加する農家は、先行する農家と同様の経営を行うことができるので、限界生産性は変わらない、ということを示しています。それが、余剰地が豊富でなくなると、その段階で参入した農家は、条件の悪い土地で経営することになったり、ある

いは、一つの経営で考えれば、労働力が過剰になってくることを意味します。たとえば、水田での稲作を考えた時に、人手があるからといって、むやみに何回も草取りをしても、その効果は段々低下する、というように、追加された労働投入に対する産出の増加は、低下していくと思われます。右下方への実線の矢印で示した動きです。「収穫通減」と書いてるのがそのことを示しています。マルサスが有名な『人口論』で描いた世界であり、経済の原則的な方向です。

これに対し、右上方へ破線で示した動きは、土地に余裕がなくなった段階で、さらなる労働投入に対して、限界労働生産性が上昇する動きを示しています。これは決して一般的ではなく、経済原則に反する方向で、それゆえ、あくまでも比喩的ですが、「革命」と言つてよいと思っています。ただし、産業革命と比較できるようなものでないことは言うまでもありません。「勤勉革命」という概念を、このような、労働力の追加投入にともなう限界生産性の上昇として、理解したいのです。ただ、種明かしをすれば何も不思議なことはなく、先に紹介した、摂津型農業経営の氏田家のようなイメージです。たとえば、米の単作経営では、

中々こうはいかないと思いますが、氏田家のように、多様な作物を戦略的に組み合わせる経営を行っている場合、多くの手間がかかるわけですが、収益は増大したはずです。

たとえば、綿花の場合、表作ですから、米作と競合します。その米作を削減し、労力をかけて田を畑に転換して、米作よりも手間も肥料も要する綿作を行うのは、米があまり儲からなくなり、綿の方が有利になっていることの反映なのです。綿作のために投入される追加的な労働に対する限界生産性は、上昇した可能性が高いと言えます。そして、こうした革新的行動には、実は物価の動向が大きく作用しています。なぜなら、先に紹介したように、氏田家では米も生産の約半分は販売し、綿花の方は、自家生産の木綿の材料となる部分も含めれば、そのすべてを販売していることになりますから、収入は、物価動向に大きく依存します。米作と綿作の割合を決めるのは、物価動向なのです。

江戸時代についていうと、戦国時代が終わって幕府と藩という全国統治の体制が確立し、平和な時代が訪れたことによって、一七世紀は人口が大きく増加します。当然、食糧である米需要が増大し、米価は上昇基調となりました。米は有利な生産物でした。農民は米の増産に励み、米納年

貢を財政の基本とする幕府や藩も積極的に新田開発を行いました。ところが、一八世紀になると人口は頭打ちとなります。米は過剰となり、米価は低下傾向となります。ここで、米に代わって、綿花や、裏作では菜種などを積極的に導入し、収益の増大をはかる農家が出現してきたのです。氏田家のような経営です。土地を高度利用して多様な作物を生産することは、労力という点では、重い負担になったのですが、収益は増大しました。

以上をまとめれば、土地と労働という視点からみた勤勉革命は、土地が豊富ではなくなった段階で、一定の土地に対する労働投入を増加させ、収益の増大を実現すること、と定義されるのです。

二 土地希少化の比較史

(1) 土地希少化の概念と対応

さて、人類の経済史は、狩猟採集―農業―工業、というように進んできたことは、間違いないところだと思います。この三つの段階を、要素投入という視点で考えると、狩猟採集は土地使用型投入パターン、農業は労働使用型投入パターン、工業は資本使用型投入パターンというように考え

ることができます。たとえば、トマトという野菜を一〇〇個獲得する時に、野生のトマトを探すためには、おそらく広大な土地が必要（土地使用的）でしょうが、熟して食べられるようになった段階で収穫するだけですから労働投入は少ないでしょう。これが、農業になると、畑の整備、種まきから始まって、さまざまな育成管理の作業を経て、収穫に到達します。採集に比べると、使用する土地は非常に少なくてすみませんが投入する労働は非常に多くなつたはずで、労働使用型という理由です。これに対し、水や光を人工的に管理した植物工場でトマトを生産する場合、工場や生産設備といった資本が必要になりますが、土地は少なく、労働投入も、減少します。つまり、工業は資本使用型投入パターンと言えるのです。

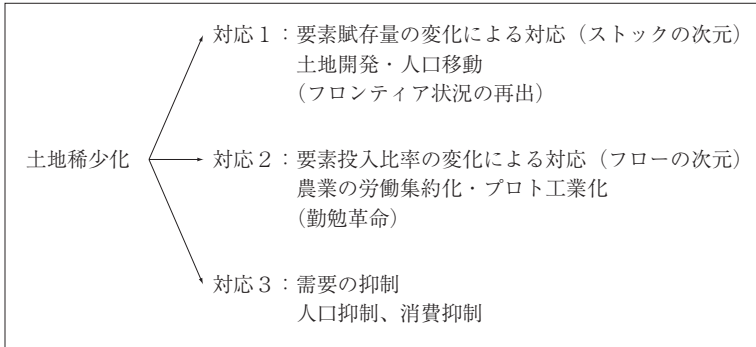
人類史のなかで農業社会という段階は、農産、水産、畜産、林産のいずれにおいても、おそらく「栽培」という言葉がキーワードだと思います。つまり、農産物、水産物、畜産物、林産物のどれをとっても、それらは、その原種も含めれば、自然界に存在するものです。「栽培」という意味は、これらの産物の基本となる生命活動を、人間が人工的に管理し、人間にとって都合のよいように、増産を図る

ということです。「栽培」するので、多大の労力が投入されることになります。どれをとっても、労働使用型投入パターンと言えます。

自然状態でも、産物が豊富に存在すれば、あえて「栽培」を行う必要はありません。水産や林産では、現代でも、採取生産があります。しかし、農産や畜産では、採取段階は、例外的な一部を除いて、はるか以前に終了し、人工的な「栽培」が主流になっています。そもそも、人類は食糧生産を自力で行うようになったことで、良くも悪くも、他の生物と大きく分岐し、地球の生物の頂点に立つことになったわけです。

「栽培」（農業）を行うことで、土地利用は大きく節約され、限られた面積の土地で、多大の人口を養うことができますようになりました。しかし、何千年という時間の経過によって、しだいに人口が増加し、土地が希少となつて行きます。もちろん、世界の各地域で、農業のあり方、土地利用のあり方は、大きく違うわけですから、どの地域でも一様に土地希少化が進んだというわけではありませんが、大きな方向性としては、どの地域でも、人口が増加し、農産、水産、畜産、林産のために利用すべき土地（水面）が、豊富

図5 土地希少化への対応



出所：大島編、前掲書(図4)、56頁。

ではなくなっていくという傾向はあったと言えるのではないかと思います。

そして、土地が希少となった時への対応としては、図5のように、いくつかの場合分けができると思われます。土地希少化とは、ストックとしての、人と土地のバランスが失われて、人口が過剰になった状態です。対応1は、ストックの次元での対応です。すなわち、ストックとしての土地の増加を図ること、あるいは、逆に移民などによって人口を移動させて、土地と人口のバランスを回復させる方向です。対応2はフローの次元での対応です。フローというのは、生産過程における、土地利用のあり方、労働投入のあり方による調整を意味しています。人口が過剰になっているのですから、この豊富になった人口を利用し、一定の土地に対する労働投入を増加させるという方向があります。勤勉革命は、まさにこの方向への対応です。土地のストックは増えませんが、二毛作などで、一定の土地を高度利用し、労働投入を増やして、多様な作物を育成するという対応です。また、農業だけではなく、氏田家の場合の木綿織りのように、手工業へ労働を振り向けることも有効な対応です。

しかし、どの地域でもこのような対応が可能であったわけではありません。勤勉革命型の対応は、氏田家の場合にみられたように、綿花や菜種のように市場性の高い作物が存在することが、重要な条件です。市場向けに販売する農産物の価格動向が重要なのです。そうした条件がない場合、労働投入を増大させても、それに見合う収益は上がらず、過剰な労働力が低い生活水準のまま農村に滞留する場合も出現します。開発経済学で、インボリユーションと言われる状態です。

対応3は、消極的ですが、需要を抑制するという方向です。江戸時代、農民に対してしばしば儉約令が出されました。村共同体のレベルでも儉約の申し合わせが行われました。人口が多くても、一人あたりの消費を抑制すれば、土地と人口のアンバランスは抑制されます。もともと安易な方法ですが、おそらくもっとも一般的な方法だったと思われると思います。

(2) 土地希少化の比較史―『土地希少化』論集の議論から―

私たちの論集『土地希少化と勤勉革命の比較史』では、ユーラシア大陸の各地で、近世という時代、だいたい一六

世紀から一八世紀ぐらいの時期に、土地希少化がどのように進んだのか、あるいは進まなかったのかを、それぞれの地域に関する七名の専門家に論じてもらいました。日本(二名)、中国、東南アジア、インド、ドイツ、ロシア、です。

まず、近世日本ですが、ここでは土地希少化が進み、先に紹介した摂津国武庫郡の氏田家のように、高度な土地利用が行われ、しかも、市場向けに戦略的な作物が選択され、一部に手工業も交えて、収益の増大をはかる、勤勉革命型の対応が行われました。もちろん、日本のすべての地域で同じような展開がみられたわけではありませんが、決して畿内などの一部の地域に限られた話ではなく、綿花、菜種、茶、たばこ、養蚕、綿織り、絹織り、醸造等々の展開は、全国の各地にみられました。ただ、時期的には、江戸時代前期の一七世紀には、まだまだ土地開発の余地があり、城下町を中心とした建設需要、貿易拠点の繁栄、鉾山開発の活発な展開など、各地に「繁栄拠点」が存在し、それらに牽引されて、人口も増大し、土地開発も進行するというように、「要素投入増大型」というべき成長がみられたこと、そして、そうした展開がしだいに資源制約に直面して転換

を余儀なくされていくことが、江藤彰彦氏が担当した、第二章「江戸時代前期における経済発展と資源制約への対応——一七世紀像再構成のための試論——」で明らかにされました。一八世紀以降の日本農業は労働集約化の方向へ進むわけですが、その段階における農民たちの労働観、自然観、作物観、技術観などについて、東海地方の農書を素材に時期別の変遷も含めて、徳永光俊氏が論じてくれました。第三章「江戸農書に見る『勤勉』と『自然』——『百姓の道』を生きる農民世界」です。

中国は地域が広大ですが、長江中下流域を中心とした中部や南部では、かなり早い時期に土地希少化の段階に到達したと思われます。青木敦氏が担当した第四章「中国経済史研究における土地希少化論の伝統」では、中国各地の史書にみられる土地希少に関する熟語表現を網羅的に確認し、各地における土地希少化の進行を確認した上で、主として欧米の研究史における土地希少化論を検討し、M・エルヴィンの「高位平衡の罫」論も紹介し、中国が勤勉革命的対応で先進的であったにもかかわらず、それが袋小路に入っていくことも展望しました。

熱帯雨林地域について、我々はどうのようなイメージを

持っているでしょうか。動植物が豊富で、食料に苦勞することがない、生活の楽な地域というイメージは、払拭できているでしょうか。一九四一年にアメリカで出版され、何回も版を重ねた経済地理学の包括的な教科書では、英語圏を想定して、そのような思い込みがあることをふまえた上で、それらは幻想であり、熱帯多雨低地の土壌は貧困であり、そのことが農業を短期的なものにし、生活を非定住的にしていると指摘しています¹²。日本の近年の東南アジア研究では、この地域を、たしかに定住的に一つの資源を継続的に利用することはできないが、多様な資源を求めて移動する「フロンティア社会」であると特徴づける議論が提出されています¹³。第五章を担当した大橋厚子氏は、東南アジアが「小人口社会」であり、土地希少化ということはなかなか展望できなかったことと、土地への定住については、労働投入の増加が収益の増加につながらず、「貧困の共有」に結果しがちな状況をジャワ島について分析し、ギアツのインポリューション論再評価の研究動向を紹介しました。

日本、中国、東南アジア、そしてインドというユーラシア大陸の東部から南部は、雨季と乾季が交替する、いわゆるアジア・モンスーン地帯です。夏の雨を利用して稲作が

行われた地域です。インドは、モンスーン・アジアの西端であり、北西部へ進むほど乾期が長くなり、西アジアの乾燥地帯に近づきます。多くの地域で雨期と乾期の対照が強烈で、雨期には農作業が集中し、大量の労働力が必要とされますが、乾期には農業が不可能になり、それらの労働力が何らかの仕事を見つけないといけないという困難を抱えています。私たちの論集では、第六章でインドを取り上げ、脇村孝平氏が「インド史における土地希少化―勤勉革命は起こったのか?―」というタイトルで、インドでは土地希少化はなかなか発生しなかったこと、降水の季節限定性が強いために勤勉革命的対応（労働集約的な土地利用）は発達しなかったこと、そして、農業が不可能となる乾期の就業確保のため、カースト間分業をとまなう膨大なサービス部門の発達があったことを指摘しました。

次には、いつきにヨーロッパのドイツへと移動します。アルプス以北のヨーロッパは高緯度ですが、大西洋の海流の影響で比較的温暖で湿潤な気候です。しかし、平均気温は低く、作物は、モンスーン・アジアのような強烈な生育力を発揮することはありません。農業は、休閑年に放牧した家畜の排泄物を肥料とすることが不可欠でした。農業経

営は、家屋・庭畑・耕地・放牧地・採草地・森林・家畜・農機具といった、経営に必要な土地と資本がワンセットとなった「農場」が基本単位となりました。飯田恭氏が担当した第七章は、『農場』と『小屋』―近世後期マルク・ブラデンブルクにおける土地希少化と農村発展―というタイトルで、「農場」の不分割原則のもとで、人口増加が小屋住み農民、農業労働者の増大へとつながったことを、非常に細かい実証密度で明らかにしました。

最後に、ロシアです。近世のロシアは、巨大な版図拡大の時代です。モスクワ周辺の小国から出発したロシアは、やがて、西はフィンランド、バルト海からポーランド、黒海沿岸まで、南はカスピ海から中央アジアの諸地域、東はシベリア全域からカムチャツカ半島までという巨大な領域を版図に収めました。土地希少化ではなく、土地豊富、労働希少、という要素賦存状態に逆転したのです。第八章を担当した土肥恒之氏は、「人口圧と農業改革―一八世紀ロシアの事例から―」というタイトルで、まず二〇世紀の古典的な農業史研究の業績を振り返り、人口圧が農業改革の推進力であるという共通理解があったことを引き出し、それに対して、近世のロシア農業が低レベルにとどまった理由

が、巨大な領土拡大にともなう絶えざるフロンティアの拡大にあったことを指摘しました。

以上のように、土地と労働という視点で、近世という時代について、ユーラシア大陸の諸地域を概観すると、人口の増大、土地希少化の進展という共通のベクトルは働いています。ロシアのようにそのベクトルが強まる以前に領土拡大によってむしろ土地豊富・労働希少という資源賦存状況へと逆転する地域、東南アジアやインドのように近世という段階では人口増加の圧力が弱く土地希少化に至らない地域、人口増加・土地希少化に対して勤勉革命型の対応を行った中国や日本、同様の圧力に対して階層分化の進展という結果をもたらしたドイツ（東エルベ）というように、じつに多様な展開が行われていることがわかります。そして、それらは、それぞれの地域における、土地と労働という経済資源の希少性のあり方の違い、あるいは地域の気象条件による土地利用のあり方の違いによるものであり、経済史における先進―後進というような関係で理解すべきではないことも、理解していただけるのではないかと思うのです。

三 風土の視点―土地希少化論の限界―

（１）マラソンレース型認識とサファリラリー型認識

唐突に「先進―後進」という議論を引き合いに出しましたが、その理由は、講演のサブタイトルに掲げた「地域の個性を把握する方法」という問題意識を持っているからです。近代という時代においては、国や地域の歴史や社会・経済を比較する場合、先進―後進という図式の中に位置づけて理解することが普通に行われてきたと思います。欧米のいわゆる西洋諸国は、自分たちは「先進」のグループに属し、アジアやアフリカの国々を「後進」と位置づけました。日本を含むアジアやアフリカの国々は、自らもそのように認識し、劣等感に悩まされてきたという歴史があります。経済史は、そういう認識に理論的裏付けを与えるような体系的理解を持っていたため、説明力が強まったような錯覚を生みだし、強い影響力を与えてきました。一国内の地域間でも同様の先進地域―後進地域という考え方が安易に使われました。こうした認識枠組みは、比喩的に、「マラソンレース型歴史認識」ということができるのではないかと思います。すなわち、決められたコースを、トップラ

ンナー、先頭集団、第二グループ、最後尾集団等々の順序で走っていく、という認識枠組みです。現代でも一人あたりGDPのランキングなどでこのような認識が見られますが、経済史では、封建制から資本主義への移行、資本主義発達史といったマルクス経済学ベースの枠組みも、同様の認識でした。マルクスが『資本論』でイギリスの事例を多く用いて説明の材料に使用したことについて、イギリスの姿は、後発諸国の何十年か先の姿を示しているとして、その説得力を強調したことは有名です。先進―後進の枠組みが、本来の意味で普遍的な発展の方向に基づいていれば、まだよかったです。先進の位置に置かれたのは、イギリスであったり、「西欧」であったり、というように、具体的な個性を持った社会、経済、政治、思想、文化などでした。「先進」として、普遍的な発展の将来像として設定されたモデル的な歴史像が、実はイギリスの歴史や文化に基づく個性的な社会や経済、そして政治のあり方であった、ということに注意が向けられたのは、比較的最近のことです。

これに対し、私は、あまり適切な表現ではありませんが、「サファリラリー型歴史認識」という考え方を模索したい

と思っています。サファリラリーそのものは環境破壊的ですし、資源浪費的な車の開発競争の色彩も否定できず、別の表現が望ましいのですが、ポイントは、通過する経路が固定されておらず、車の適性や運転手の技量に合わせて最適な経路選択ができるという点と、それをゴール（目的地）と考えるのはふさわしくないのですが、参加している車がある共通の方向へと向かっている点、人間社会の歴史に関する比喩表現として、当たっているのではないかと思うのです。経済史（供給側）についていえば、先ほど述べた、狩猟採集―農業―工業（土地使用型―労働使用型―資本使用型投入パターン）という変化は、ごく大まかの意味で、人類社会の共通の、普遍的な発展方向であったと言えるでしょう。『土地希少化と勤勉革命の比較史』の問題意識は、近世という段階での経済史（供給側）の普遍的な方向性と、各地域における土地と労働の希少性のあり方の多様性、さらにはそれらをめぐる経済制度の多様性の総合的な理解、⁽¹⁴⁾というところにありました。そして、この視点に立つことで、近世の経済発展の普遍性と多様性を、理解できるのではないかと考えたのです。

(2) ヨーロッパの農業から考える

論集では、そのような意図で、ユーラシア大陸の各地の比較を行いました。比較のための道具（概念）は、生産要素としての土地や労働、それらの希少性、要素投入比率などなど、普遍的な言葉で表現された概念です。普遍的、中立的な概念でなければ、バランスが取れた比較はできないと考えたのです。それは、たとえば、イギリスをモデルとして考えて、他地域はそこへ向かって進んでくる後進的経済と見るような経済史に比べれば、ずっとマシだとは思いますが、他方で、各地域の農業のあり方の具体像に接すると、そのような普遍的な概念が、果たしてどの程度有効なのか、どれほどの説明力をもつか、動揺を感じざるを得ない部分もあります。以下では、一九三〇年代頃のスコットランドとイングランドの農場の具体例を紹介し、先に紹介した、摂津国武庫郡の氏田家の農業経営との、なんというか、「違い」というより、ほとんど比較にならないのではないかという印象を共有していただきたいと思います。

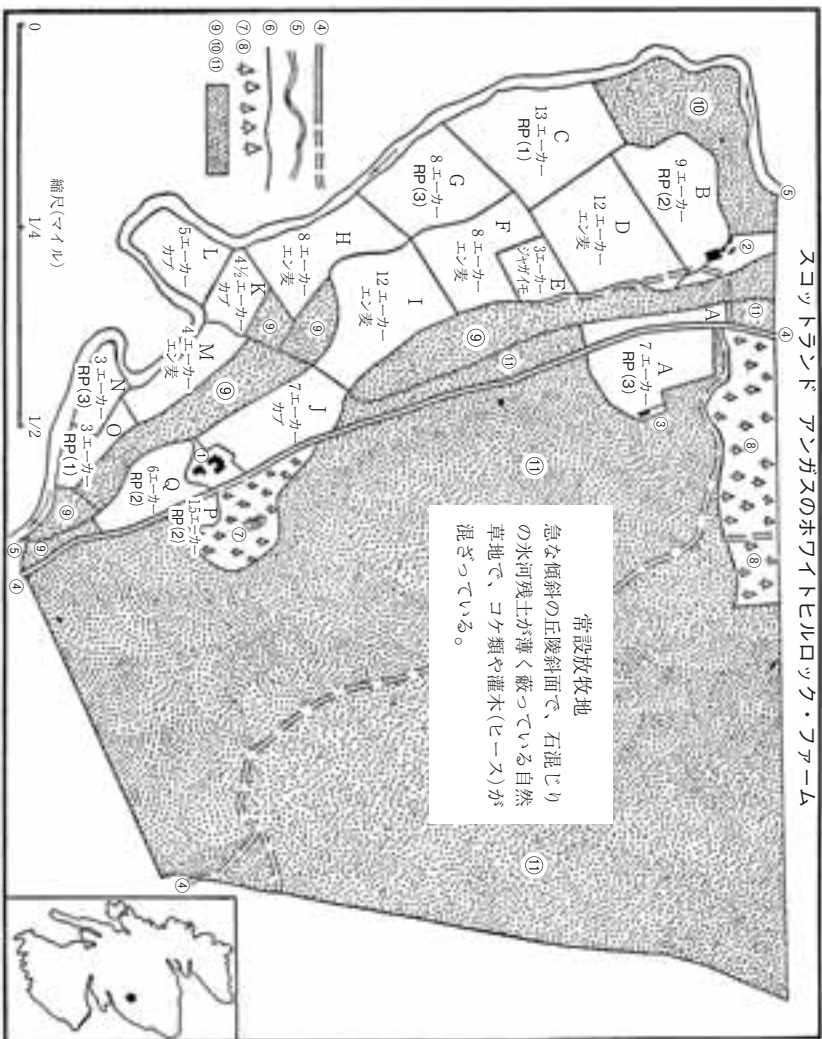
図6は、一九四一年にアメリカで出版された経済地理学の教科書に掲載された、スコットランド・アンガス・グレンクラバ（Glen Clova）のホワイトヒルロック農場の土地利

用図を、説明などを日本語にして作図し直したものです。⁽¹⁵⁾

原著で、典型的なスコットランドの農場として紹介されています。この農場は、総面積が五二五エーカー（二二〇ヘクタール）、土地利用の構成は、三八五・五エーカー（一五四・二ヘクタール、七三％）が常設放牧地、一一四エーカー（四五・六ヘクタール、二二％）が輪作農地・放牧地、五・五エーカー（二・二ヘクタール、一％）が住居・建築物用地、二〇エーカー（八ヘクタール、四％）が森林です。図中の各土地区画には、番号がつけられており、図の注にその説明がなされています。

数字ではなく、AからQまでのアルファベットがつけられているところは、輪作の農地・放牧地です。南エスク川（⑤番）流域の緩やかな傾斜地および平地です。アルファベットの下に、面積が記されています。その下が、現在の利用状態で、作物の種類が書かれています。RPと書かれているのは、輪作放牧地（rotation pasture）のことで、カッコ内に書かれた1から3の数字は、1年目、2年目、3年目ということを示しています。6年の輪作が行われていて、その順序は表2の通りです。輪作地も6年のうち3年間は干し草用の牧草地ないし放牧地にされるのです。

図 6 ホワイトヒルロック・ファームの土地利用図



注：(図中の番号の説明)①家屋、肉牛と羊の畜舎、豚・ニワトリや農機具用の格納小屋、②飼料庫と飼槽(長型かいばおけ)、③羊の小屋と肥育場、④道路、⑤南エスクリ川、⑥石垣・生け垣・鉋金によるフェンス、⑦防風のために植えられたオウシエウアカマツ・カラマツ・トウヒ、⑧防風および垣根材や燃料材のために植えられたオウシエウアカマツ・カラマツ・トウヒ、⑨沖積低地の湿地帯の常設牧草地、⑩沖積砂地・砂利地の常設牧草地、⑪高台荒れ地の常設牧草地。RP は Rotational Pasture(輪作放牧地)の略。カッコ内の数字は年次を示す。

小枠内はこの農場のスコットランドでの位置。原図はキャサリン・P・スノー博士の情報に基づいて描かれた。

出所：Clarence Fielden Jones, *Economic Geography*, New York: Macmillan, 1941, p.310, を基に筆者作成。

表2 ホワイトロック・ファーム
の輪作システム(6年輪作)

1年目	エン麦
2年目	カブないしジャガイモ
3年目	エン麦
4年目	輪作放牧地(1年目) (干し草ないし放牧)
5年目	輪作放牧地(2年目) (干し草ないし放牧)
6年目	輪作放牧地(3年目) (干し草ないし放牧)

出所：図6と同文献より作成。

表3 ホワイトロック・ファームの農事暦

早春	厩肥運搬と耕地の準備
3月	ジャガイモの植え付け
4月	エン麦の種まき
5月	カブの種まき
春	雌羊の子育ての世話
同	羊毛刈り取り・保存・販売
夏(盛夏)	牧草の刈り取り、乾燥、積み上げ作業(夏の降雨により乾燥困難)
9月	エン麦刈り取り、脱穀
10月	ジャガイモ・カブの堀取り、保存
秋・冬	肉牛と子羊の肥育(カブ、エン麦、干し草による)と出荷
冬	老羊の放牧(常設放牧地・輪作放牧地)、馬具・機械類の修理、燃料の調達(森林地)

出所：図6と同文献より作成。

輪作農地と⑪番の常設放牧地の境目あたりを④番の道路が走っています。そのあたりから図の右へ向かってかなり急な上り斜面になっています。⁽¹⁶⁾⑪番の常設放牧地は、「急な傾斜の丘陵斜面で、石混じりの氷河残土が薄く蔽っている自然草地で、コケ類や灌木(ヒース)が混ざっている」と書かれています。アンガスは、北緯五六度。日本の近くで言えば、カムチャツカ半島の真ん中あたりの緯度です。私たちにもテレビ等の映像で記憶されている、スコットランドの荒涼とした石混じりの草地というイメージが目につか

びます。

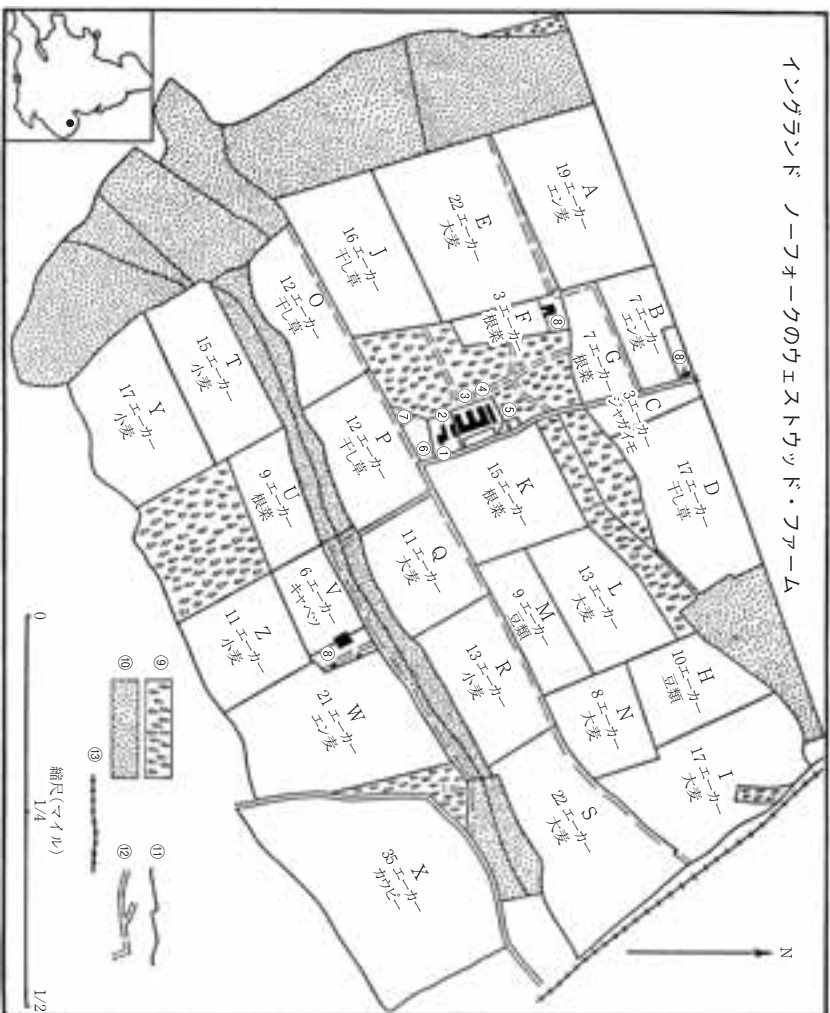
エン麦が輪作に二回登場するのは、「冷涼で湿った夏にたいするエン麦(オーツ)の適応性のために、他の穀類は生産できない」と書かれています。また、エン麦は、「結実を待たずに干し草用に刈り取られる畑もある」と書かれています。常設放牧地が七三%、二二%の輪作農地もその半分(一一%)は干し草用の牧草地ないし放牧地、そして作物が作られる部分も、干し草用のエン麦があったり、カブも飼料用がありますから、要するに、この農場は、ほとん

どすべての土地が畜産に向けられていると言ってよいのです。冷涼な気候が小麦等の穀物生産には不適なのです。ほとんどの収入は、肉牛、子羊（食肉用）、羊毛によって得られる、と書かれています。飼育する家畜は、肉牛が五〇頭、羊（スコティッシュ・ブラックフェイス種）が二五〇〜三〇〇頭です。自家用に家禽類を飼育し、また農場内で消費される乳製品や肉類は自製します。雇用する労働者は六名（男子四名、女子二名）、役畜は馬が四頭、機械類は、プラウ、植え付け（種まき）機、リーパー（刈り取り機）、スレッシャー（脱穀機）です。年間の農事暦は表3に示しています。印象的なのは、冬期に常設放牧地に「老羊 old sheep」を放牧する、という部分です。スコットランドは海洋性気候のためにそれほど寒くないとしても、「石ころ混じりの水河残土の急な斜面」の放牧地に、冬期、それほどの草があるとは思えません。羊という家畜の強靱な生命力を感じます。⁽¹⁷⁾

同じ経済地理学の教科書には、大都市市場に近く、市場向けに穀物および畜産の高度な生産を行っている農業地帯、イングランド・ノーフォークのウェストウッド・ファームが紹介されています。図7は、同農場の土地利用図です。⁽¹⁸⁾

総面積は五二〇エーカー（二〇八ヘクタール）、そのうち三五〇エーカー（二四〇ヘクタール、六七％）が輪作農地、一〇七エーカー（四二・八ヘクタール、二一％）が常設放牧地、一〇エーカー（四ヘクタール、二％）が住居・建物用地、五三エーカー（二一・二ヘクタール、一〇％）が森林という構成です。前の図と同じように、図中の土地区分には番号が振られており、その注記は日本語にしています。

スコットランドの農場とは異なり、全体の三分の二が、輪作農地です。それらには、AからZまでのアルファベットの振られています。先ほどと同様に、アルファベットの下が面積、その下が作物の種類です。この農場は、五年の輪作を行っており、その順序は表4の通りです。それを、各耕地について整理すると、表5のようになっていて、かなり複雑であることがわかります。ある年度において、AからZの二六区画の土地が、このように利用され、それぞれの土地は、表4のような輪作のサイクルをたどっているのです。各年次に配当される土地面積はほぼ均等であることと記されています。このような複雑な輪作に基づく土地利用システムを維持する理由は、①労力配分の均等性や保有家畜（役畜）の効率利用、②作物の輪作システムの維持、



インダランド ノーフオーグのウェストウツド・フアーム

図7 ウェストウツド・フアームの土地利用図

注：(図中の番号の説明)①家屋および作業場、②家禽類飼育場と小屋、③馬と牛の畜舎、④農機具格納小屋、⑤羊と豚の小屋と肥育場、⑥庭園・果樹園、⑦養蜂場、⑧飼料庫・飼槽、⑨肥育場、⑩森林、⑪常設放牧地、⑫生け垣および針金フェンス、⑬道路、⑭鉄道
小枠内は、この農場のインダランドでの位置。原図はジャック・ブレルトン氏の情報に基づいて描かれた。
出所：図6と同書、p.312.を基に筆者が作成。

③複数の農産物・畜産物からの収入確保、という三点が指摘されています。

小麦の全部と大麦の半分は販売されます。小麦は製粉用、大麦はモルト用です。キャベツ、野菜類、根菜類（スウェーデンカブ・飼料ビート・カブ・ジャガイモ・ニンジン）の一部も販売されます。他方で、耕作地の三分の二は、牛類、羊類、豚類、ニワトリ、動力用の馬のための、飼料用

作物の生産に充てられています。この農場は、毎年、三五〇頭の肥育された子羊、一〇〇頭の肉牛、四〇〇頭の肥育された豚、数百羽のニワトリ、雌羊二六〇頭の羊毛、ニワトリ三〇〇羽の卵、乳牛三〇頭のミルクを販売しています。保有（ストック）ではなく、毎年の販売数量（フロー）です。これらの家畜は、すべてがこの農場で養育されたのではなく、羊と肉牛はイングランド・スコットランドのヒースに

表 4 ウェストウッド・ファームの輪作システム（5 年輪作）

1 年目	クローバー 飼料用干し草 放牧地
2 年目	小麦
3 年目	根菜 ジャガイモ
4 年目	エン麦 大麦
5 年目	大麦

出所：図 6 と同文献より作成。

表 5 ウェストウッド・ファーム輪作農地の土地利用

作物の種類	耕地記号（エーカー）	合計 （エーカー）
干し草	D(17) J(16) O(12) P(12)	57
小麦	R(13) T(15) Y(17) Z(11)	56
根菜	F(3) G(7) K(15) U(9)	34
ジャガイモ	C(3)	3
エン麦	A(19) B(7) W(21)	47
大麦(モルト用)	E(22) I(17) L(13) N(8) Q(11) S(22)	93
カウピー (飼料用ササゲ)	X(35)	35
豆類	H(10) M(9)	19
キャベツ	V(6)	6
総計		350

注：一応、輪作の順番に配列したが、カウピー・豆類・キャベツは、輪作の年次がわからないので、最後に配列している。

出所：図 6 と同文献より作成。

表6 ウェストウッド・ファームの農事暦

春(畜産関係)	子羊・子豚の世話、肉牛・肉豚の肥育と出荷、肥育場の清掃
春(農産関係)	厩肥の散布、農地の耕起、エン麦・大麦・エンドウ・豆類・干し草・キャベツ・(春まき)根菜の播種・植え付け
夏前半	干し草・エンドウ・豆類の刈り取り・乾燥・納屋への積み込み・干し山作成
夏後半	小麦・大麦・エン麦の刈り取り・脱穀、夏蒔き根菜の播種(冬蒔き大麦・小麦の刈り株畑ヘディスキング後播種)、根菜類の掘り起こし・プラウがけ、家畜類の常設放牧地・刈り株畑での放牧
秋	小麦・冬蒔き大麦の播種、白カブの引き抜き・洗浄・出荷、キャベツの切り取りと出荷、スウェーデンカブ・飼料ビートの引き抜きと貯蔵穴への埋蔵、雌羊・乳牛・子牛を放牧地・干し草の刈りあと・根菜の葉茎地で放牧、追加の肉牛・羊・豚の購入と囲い柵内での肥育(粉碎飼料)、秋のプラウがけ
冬	残りの根菜類の引き抜きと出荷ないし飼料用に貯蔵、秋のプラウがけ終了、垣根の刈り込み、薪割り(労働者が余暇に実行)、雌羊と家畜(幼年)は刈り株畑や根菜畑で飼料摂取、肥育用家畜は囲い柵内で注意深く飼育
通年	乳牛・ミツバチ・ニワトリの入念な管理

出所：図6と同文献より作成。

蔽われた荒地の地域から、また肉牛はアイルランドから、肥育目的で購入されます。肥育用豚は、近隣の農場から購入されます。

農場には、一六頭の馬、一台のトラクター、そして、一台の脱穀機、一台の飼料グライNDERを含む、多くの農機具が備えられています。労働者は、二一歳以上が一六人、二一歳以下が八人、合計二四人です。スコットランドの農場は、わずかに六人でしたから、ウェストウッドの農場では、いかに多くの作業課題があり、必要とされる労力が多いかがわかります。年間の作業暦は、表6の通りです。作業の配分が、相当に複雑であることがわかんと思います。この農場の効率的な経営には、作物、家畜、農場の作業、販売用の便宜施設や販売可能性について、十分な知識を必要としたと書かれています。つまり農場経営の専門的能力です。この農場の集約性は、冬期に急傾斜の石ころ混じりの常設放牧地に老羊が放牧されていたスコットランドとは対照的に、冬期、「肥育用家畜は囲い柵の中で注意深く飼育される」と書かれていることに象徴されていると思います。

これら二つの農場の事例は、正確な年代は記されていま

せんが、本の出版が一九四一年であることから考えて、おそらくは一九三〇年代の状況が報告されたものと思われる。では、いったいいつ頃から、このような農場が主流となったのでしょうか。言うまでもなく、これらの農場は、いわゆるエンクロージャが行われた後の姿であることは間違いない。エンクロージャ以前のオープンフィールド・システム（開放耕地制度）の存在理由と、そのエンクロージャ進行の経済的要因については、所有権の経済学を応用して分析した、カール・ダールマンの業績が、私は、もつとも説得的な説明であると思っています。ダールマンによれば、オープンフィールド・システムという特殊な土地制度は、英国（西欧）農業が、一方で、個人的な土地利用の方が効率性を高める穀物生産と、他方で、集団的な土地利用が効率的な畜産（放牧）という二つの活動を並存させ、どちらかに特化することがなかった段階では、有効で効率的な制度であったと論じました。集団の利用と個人の利用を定期的に交替させる、一見すると非常に特殊な土地利用が行われた理由です。穀物生産も、畜産も、主に自家用の段階です。これに対し、エンクロージャは、畜産物、農産物が、市場で有利な産物となり、地域の実情に

応じて、そのどちらかに特化する時に発生する、というのがダールマンの説明です。一六世紀、イギリスの羊毛工業が成長し、原料の羊毛価格が上昇していくと、畜産部門（羊の放牧）に特化し、穀物生産部分を排除する目的で、囲い込みが行われます。理論的には、少数の地主の手に土地が集中することになります。第一次エンクロージャの進行です。次に、一八世紀、大都市の発展や産業革命の進行にともない、穀物をはじめとする農産物需要、食肉などの畜産物需要が高まると、集約的な農産物・畜産物生産を目的とした、エンクロージャが進行します。第二次エンクロージャです。先の二つの事例紹介に用いた経済地理学のテキストには、歴史的な説明はありませんので、あくまでも推論ですが、スコットランドのホワイトヒルロック農場は、羊毛生産に特化したケース、イングランド・ノーフォークのウエストウッド農場は、大都市市場を想定した、農産物・畜産物の集約的生産のケースであろうと思われる。図8は、やはりイングランド東部の農業地帯であるリンカーンシャーで、一八五〇年に雑誌に掲載されたモデル農場（本拠地部分・ファームステッド）です。意欲的な地主は、資金を借り入れ、産業革命で発達した蒸気エンジンを

図8 モデル的農場の広告(1850年、イングランド・リンカーンシャー)



出所：Elizabeth Bates, *Farming in Lincolnshire, 3000 BC to 2000 AD*, The Heritage Trust of Lincolnshire, 2004, p.30 (Lincolnshire Heritage Booklets).

導入し、それまで耕作不可能であった低湿地の排水を行い農地に転換し、家屋や倉庫・作業場などを建設して、「農場」を完成し、有利な価格で売り出したり貸し出す、ということが盛んに行われたようです⁽²⁰⁾。この広告の農場も、一〇馬力の固定式蒸気エンジンが設置されていると書かれています。中央部の高い煙突がそれを示しています。先に紹介した、ノーフォークのウエストウッド・ファームも、おそらくは、一八世紀後半から一九世紀にかけてのいつ頃かに、エンクロージャーされた農地に建設された「農場」だったのではないかと思われるのです。

おわりに―風土について―

ただいま紹介した、スコットランドとイングランドの農場の事例は、土地希少化の論集の刊行後、たまたま気づいたものです。二〇世紀半ば以前までの地理学の業績に関心を持ち、調べている中で出会ったものです。イギリスの農業経営の具体的な状況がわかったので興味を持ち、紹介させていただきました。皆様は、講演の前半で紹介した、摂津国武庫郡西昆陽村の氏田家の経営と、スコットランド・イングランドの二つの農場を比較して、どのような印象を

もたれるでしょうか。時代的には、氏田家は一八世紀末、英国の農場は、二〇世紀前半という時代の食い違いはあります。しかし、英国の二つの事例は、一八世紀半ばから一九世紀半ばの第二次エンクロージャーの過程（羊毛生産に特化したスコットランドの農場はより古いかもしれない）で成立してきた農場の姿を残していることは間違いないと思われます。二〇世紀後半に向けての大きな変化は、農業機械が、蒸気エンジン利用からディーゼルなどの内燃機関へと転換し、より機動的に、また、多くの作業が機械化したことだと思われます。一九三〇年代は、まだ、内燃機関エンジンの普及は、進んではいけません。氏田家の方も、明治に入って、明治二〇年代頃までは、綿作や菜種作をとまなう経営を続けていました。その後、表作は米、裏作は麦へと単純化することになります。したがって、両者は、全く時代が食い違っているわけでもないのです。そして、ウェストウッド・ファームが、大都市での穀物需要、野菜需要、食肉需要など、農産物・畜産物の需要の増大に対応して、非常に高度で複雑な農業経営を行っている様子は、米作だけではなしに、綿作や菜種作を行い、織物生産も手がけていた、氏田家の「摂津型農業経営」とも、十分に比較でき

るところではないかと思えます。土地希少化のメカニズムも共通して働いていたことは間違いないありません。そして、もしかすると、ウェストウッド農場も勤勉革命型の対応であったとも言えるのではないかと思ったりします。とくに、農場が成立する頃までの近世の時期がどうであったのか、強く関心をもちます。

しかし、ウェストウッド・ファームは五二〇エーカー（二〇八ヘクタール）、氏田家は二町九反（二・九ヘクタール）という圧倒的な規模の違いにも、注意を払わざるを得ません。ウェストウッド・ファームの規模は、英国でも「大農場」に属する規模ではありません。⁽²¹⁾しかし、氏田家も、この規模は近世日本では大規模に属します。両者の規模の違いはどこからくるのでしょうか。日本を含む東アジアの農業経営の小規模性は、水田稲作の高い土地生産性、連作可能性によって説明できると思います。他方で、英国の大規模性は、いったい何が要因なのだろうと思うと、どうしても畜産の位置付けに関心を持たざるを得ないのです。戦後日本の農業史研究では、西欧の農業における家畜の位置付けは、穀物生産の肥料供給というイメージが強かったと思います。しかし、スコットランドのホワイットヒルロック農場、イン

グランドのウェストウッド農場の、どちらにしても、畜産は独自の重要性をもっています。スコットランドの農場は、ほぼ畜産（羊毛）専門です。農産の方が畜産に従属しているという印象をもちます。家畜を飼育する場合、その飼料を外から購入するのでなく自前で調達する場合、膨大な面積の土地が必要であることは、容易にイメージできます。ヨーロッパの農業における畜産の重要性は、中世はもちろん、おそらく、民族大移動の頃から続いているものであるうと思います。ヨーロッパの風土に規定されたものです。そして、その大規模経営に適合する、大型機械や資本主義的な経営システムも発達させてきたと言えます。

二〇世紀後半、日本だけではなく、欧米においても、地理学的視点からの研究は、「環境決定論」という批判を受け、経済史や歴史学など、多くの分野で、地理的要因への関心が低下しました。代わって、先進―後進という時間の先後関係による認識が「科学的」として台頭しました。しかし、二一世紀初頭の現在、ほとんどすべての国・地域が経済成長のスタートを切り始め、一部はすでに先進国化し、逆に先発の「先進国」の行き詰まりが顕著となる時代状況のなかで、先進―後進論は、説明力を失っています。私は、

再び地理的な視点が必要となっているように感じています。たとえば、イングランドの農場経営には、地主（資本所有者）、借地農業者（経営者）、労働者という、三つの経済的プレイヤーが登場しています。これは、株主資本家、企業経営者、労働者という、資本主義企業と全く同様の役割分担です。農場の労働者は基本的に一年契約で、毎年、四月の決められた日に、より待遇のよい農場へ移ります。⁽²³⁾地主（資産保有者）は、自らの資産の有効利用と資産価値の上昇が最大の関心事です。有利と思えば資産の売却も普通に行います。経営者（ファーマー）は、地主から任された資産の効率的な利用に関心を集中します。これはまさに現代にもつながる英米型の資本主義企業のあり方そのものです。そして、従業員共同体型の我が国の「資本主義企業」には、見られないものです。それぞれの国や地域の「近代」には、自らの「前近代」から受け継いだものが色濃く反映しているのです。地域の「個性」です。そして、その個性を理解するためには、風土という要因が、無視できない大きさで登場してくるのではないかという思いを強く感じるので、わかりにくい話にもかかわらず、最後までご静聴ありがとうございました。

- (1) 速水氏の関連文献は、速水融『近世日本の経済社会』（麗澤大学出版会、二〇〇三年）に収録されている。
- (2) 川勝平太『日本文明と近代西洋―鎖国―再考―』（日本放送出版協会、一九九一年）。
- (3) 最新のものとして、杉原薫「グローバル・ヒストリーと複数発展径路」（杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生編著『地球圏・生命圏・人間圏―持続的な生存基盤を求めて―』京都大学学術出版会、二〇一〇年）
- (4) Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2000.
- (5) Jan de Vries, *The Industrious Revolution: Consumer Behavior and the Household Economy, 1650 to the Present*, Cambridge: Cambridge University Press, 2008.
- (6) ド・フリースの著書における、東西比較（西欧と東アジア）のあり方にたいし、斎藤修が批判し、ド・フリースも反論した。Osamu Sato, "An Industrious Revolution in an East Asian Market Economy?: Tokugawa Japan and Implications for the Great Divergence," *Australian Economic History Review*, 50-3, November 2010. Jan de Vries, "Industrious Peasants in East and West: Markets, Technology, and Family Structure in Japanese and Western European Agriculture," *Australian Economic History Review*, 51-2, July 2011.
- (7) 斎藤修（「書評論文」）勤勉革命論の実証的再検討）（『三田学会雑誌』九七一、二〇〇四年四月）。
- (8) 日本農書全集第四卷、農山漁村文化協会、一九八〇年。
- (9) 日本農書全集第二六卷、農山漁村文化協会、一九八三年。
- (10) 山崎隆三『地主制成立期の農業構造』青木書店、一九六一年。
- (11) 徳永光俊『日本農法史研究』農山漁村文化協会、一九九七年。
- (12) Clarence Fielden Jones, *Economic Geography*, New York: Macmillan, 1941, p.143.
- (13) 田中耕司「フロンティア社会の変容」（矢野暢編『地域研究と「発展」の論理』講座現代の地域研究・第四巻、弘文堂、一九九三年）、その他。
- (14) 私は、多様性の認識が大事であると思うが、同時に普遍的な方向性の認識も堅持する必要があると考えている。「参照軸」としての普遍的な方向性の認識があつて初めて、多様性も理解できるはずである。それがなく、「多様」ではなく「無統一」となるであろう。経済以外にも、社会については、普遍的な発展方向が考えられていると思う。かつての「身分から契約へ」とか、「ゲームンシャフトからゲゼルシャフト」、「コミュニティからアンシエーション」といった方向性は、さらに分析的な社会学のミクロ理論、マクロ理論へと精緻化されている（高田保馬や富永健一の社会学を念頭においている）。問題は政治学で、この分野では、普遍的な「政治的發展」

といったものが提起されず、依然として規範的な学問にとどまっている。そのことが、歴史学分野で多い、政治史、政治制度史の停滞をもたらしている。

(15) *Op. cit.* (note 12), p.310.

(16) 「グーグルマップ」の航空写真で見ると、かなり正確にイメージがつかめる。「スコットランド、アンガス、グレンクラバ」で検索できる。

(17) 講演後、アイルランド経済史を専門とする本多三郎先生に、「冬のスコットランドを旅行すると、冷たい雨がしょぼしょぼと降る中、ほとんど草があるとは思えないような荒地に、羊がじっとたたずんでいる姿が印象的です」という話を伺った。

(18) *Op. cit.* (note 12), p.312.

(19) Carl Dahman, *The Open Field System: A property rights analysis of an economic institution*, Cambridge: Cambridge University Press, 1980.

(20) Elizabeth Bates (ed.), *Farming in Lincolnshire, 3000 BC to 2000 AD*, The Heritage Trust of Lincolnshire, 2004, pp. 25-31.

(21) D. B. Griggs, "Small and Large Farms in England and Wales: Their Size and Distribution," *Geography*, 48-3, July 1963, p. 268.

(22) Jared Diamond, *Guns, Germs, and Steel: The Fate of Human Societies*, New York: Norton, 1999, p. 26.

(23) Alan Stennett, *Memories of Lincolnshire Farming*,

Newbury: Country Books, 2009, p.15. そのほか、大槻正男「日本農業経営の驚異」(昭和十七年一月稿)、『大槻正男著作集』第六卷、楽書房、一九七八年、二二―三二頁)。

農業労働者の存在・不存在は、西欧と日本(東アジア)の農業経営の大きな違いである。この論稿で大槻正男は、多くの論者が、豊かな生活をおくるイギリスの農業経営者(ファーマー)と日本農民の貧弱な生活を比較して、イギリス型農業が自明的に優れていると結論しているが、それは間違いであり、比較すべきは、イギリスの農業労働者の生活状態である、と指摘している。そして、自分の欧州農業視察(大槻は昭和二・四四年に欧州留学している)の結果として、「欧州諸国の大農地域における農業労働者の生活状態は、いかなる意味においても小農地域における家族労働農業者のそれに優るものではない」と述べている。本注記にあげたリンカンシャー農業の記録でも、「農業経営者は、彼らの労働者の宿舎より彼らの家畜の畜舎の方により大きな関心をもっている、というよく聞かれる(農業労働者たちの)不平にはかなりの真実が含まれている」と書かれている。

このことは、私が定義した、「土地と労働という視点からの勤勉革命」という概念にも、重大な問題を突きつけている。すなわち、土地希少化のもとでの追加的労働投入に対する収益の増加は、本当に労働投入に対するリターンなのか、それとも経営能力の追加投入(市場向けの生産を適確に行う能力)に対するリターンなのか、と

いう問題である。東アジアでは、家族労働による農業経営なので、両者は一体となっている。本文で紹介したイギリスのウエストウッド・ファームは、大都市市場へ向けた農産物・畜産物生産のため、高度な土地利用を行い、農業労働者も多数抱えていた。スコットランドの農場に比べれば、同じ面積に対して多量の労働投入（人数で四倍）を行い、高度な土地利用を行い、明らかに収益も多かったと思われる。先ほどは、そこから、「勤勉革命型」と言えるかもしれない、と述べた。しかし、ここで増加した収益を享受するのは、農業経営者と地主であり、農業労働者はその成果の配分を得られなかったのではないか、ということは記しておく必要がある。

〔付記1〕 本稿は二〇一〇年五月一五日、大阪経済大学日本経済史研究所主催「黒正塾 第八回春季歴史講演会」の講演原稿に手を加えたものである。

〔付記2〕 本稿の図3、図6、図7、図8は、それぞれの「出所」記載の文献から図版を転載している（図6・7は新たに作図し、説明などを日本語に翻訳した）。図3・8については出版者の許可を得たことを記し、謝意を表する。図6・7については出版社が当時の形では存続していないため、連絡が取れなかった。関係者のご理解をお願いしたい。

（おおしま まりお・大阪市立大学大学院経済学研究科教授）